寄せ太鼓

北九州市立長崎街道
木屋瀬宿記念館
運営協議会 広報部会
北九州市八幡西区木屋瀬
三丁目16番26号（〒807-1261）
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

第22回 宿場まつり（筑前さくらぜ）

今年は11月2日(日)　成功させよう住民の手で!

平成五年に始められた「筑前木屋瀬宿場まつり」は、今年で二十二回を数え十一月二日に開催されます。

このまつりは、木屋瀬の持つ歴史的な文化財産を活かし、小・中学生から高齢者まで全住民が参加・参画し、近郷の市町との連携を含め、内外から大きく期待を寄せられるまで成長してきました。

本年もこの祭りの成功を期して実行委員会が立ち上げられ、数次にわたる検討が進んでいます。

実行委員長は、高宮自治区会長が務め自治区会、まちづくりの会、老人クラブ連合会、史料保存会、商工連盟、商栄会、宿場踊り保存会、青年会の八団体で主要な部会活動を固めています。

◎**事務局**（梅本静一部会長）は、まつりの総括的な立場にあり、開会セレモニーの実施や案内状・お礼状の作成と宛名書き、ご寄付のお願い文作成など教宣啓蒙的な業務を受け持ちます。

◎**企画部会**（近藤浩部会長）は、祭りを形作る全ての行事の企画や出演者との折衝など祭りの成否を決める重要な役割を担っています。

◎**広報部会**（麻生太一郎部会長）は、ポスター、町内会回覧、折込チラシ、青空マップなどの作成に当ると共に関係先への配布や掲示などを受け持っています。

◎**運営部会**（松尾洋輔部会長）は、まつり会場全てのテント設営をはじめ幟や横断幕の取り付けなど事前準備一切、当日出演者の飲食対応、後片付けなどを受け持ち最も人員を要する業務です。

◎この他、**会計担当**（山田靖理事長）は寄付などの集計や各種支払いなどを受け持ち、裏方として頑張る音響係、記念館職員、そして来場者へのおもてなしを受け持つ女性ボランティアの皆さんなど数百人に及ぶ人々が祭りに携わっています。

このように「宿場まつり」は、自主企画・自主運営のまさに手造りのおまつりです。

住民の皆さんの物心両面にわたるご援助を心からお願い申し上げます。

木屋瀬宿記念館運営協議会
広報部会長 徳永興紀

年越し蕎麦は挑戦手打ちで!

日時
平成26年12月28日(日)
10時～15時

参加費
1,200円（実食:かもそば）
※材料費。7人分持ち帰れます
※追加1,000円で別途7人分持ち帰れます

定員
30名（予約制）
※蕎麦打ち名人に保存法、調理法ほかも指導していただきます。

申込先
木屋瀬宿記念館
☎093-619-1149

年越しそばの販売もしております。

筑前木屋瀬祇園祭の巡行が大盛況の内に終了する事が出来ました事は、私共赤山・青山当番町だけではなく、地域全体の方々の御支援と御指導のおかげだと町内会一同、深く感謝している次第です。誠に有難う御座居ました。

当初、当番町をお受けした時点では、戸数が少なく果たして山笠の巡行が無事に全う出来るか不安でしたが、女性会の皆さんが裏方に徹し、何日も話し合いされ、本番時には献身的な行動をして頂きました事に感謝し、お礼申し上げます。

最後になりますが、関係者の皆様方が今後共御指導下さいます様にお願いし、御礼の言葉と致します。

平成26年度筑前木屋瀬祇園祭　一番山 青山総取締役（芝原）今川雪雄

木屋瀬には、季節の移り変わりに、撓やかに溶け込むように人々の靭やかな営みがあり、それらを鮮やかに映すかのような祭りが永々と続いています。

春の訪れは種蒔きの始まりであり、子供達の成長を祈願する「須賀神社春祭や扇天満宮祭」。夏は疫病退散を願う「夏越大祓（ナゴシノオオハラエ）や祇園祭」、そして禍を祓う「庚申祭」。秋の実りに感謝を捧げる「須賀神社秋祭」。冬には厳しい寒さに耐えながら魂を充実させ、新年を迎えての「歳旦祭」等々。中でも暑い季節の熱い祇園祭は、木屋瀬人形師を誕生させようとする程の男衆の誇りの象徴です。「木屋瀬の山笠（ヤマ）は半飾り」と伝えられた筑前木屋瀬祇園祭。

二番山笠当番町をたくさんの方々に支えられ終えることができました事に、心から感謝申し上げます。

平成26年度筑前木屋瀬祇園祭　二番山 赤山総取締役（新地町）伊藤淳一

宿場町木屋瀬。心に郷土が染みてくる。歴史とふれあう記念館。

わたしの昔話

木屋瀬と夷講（前編）

木屋瀬は、文明（紀元二一二六）以前より開けた全国有数の宿駅であり、宗祇法師の筑紫道記にも「コヤノ関」と記されている古駅であります。徳川の世となって筑前六宿（黒崎・木屋瀬・飯塚・内野・山家・原田）の一の宿駅となり、遠賀川を隔てて、福岡・唐津へ通ずる筑前内宿（赤間・畦町・青柳・箱崎）の追分宿として交通の要衝になり、九州諸大名の参勤交代に、諸国旅人の往来に大賑わいを呈していました。

「飯塚木屋瀬碁盤の表
駒を早めて黒崎へ」

と長持歌が流れていた街道には、松並木が続き、宿場裏を流れる木屋瀬大河（遠賀川）には沼地が多く、芦草が茂りて鳥たちの楽園となり、野生の蓮の花が咲き乱れ、鍋鶴が舞い遊ぶ等、四季それぞれに旅人を楽しませていました。こうした環境の木屋瀬は、神仏有縁の地としても貴重な歴史をもち、古き良き習慣や行事も多く伝えられています。

その中の恵毘須講の祭りに触れてみましょう。

十二月三日

各戸の戸主が集まる恵毘須の御座と、十一歳の男の子を頭と祝う子供恵毘須の二つの祭りが行われます。

子供恵毘須の祭

男の子が十一歳になると、頭（カシラ）と呼ばれます。頭の親達が総出して恵毘須様を祭り、御座を開き、頭は羽織袴にて客となり、祝いを受けます。子供恵毘須の笹山笠は、頭の親達によって本町四丁に一本、新町四丁に一本建てられます。山笠の幕や、頭が持つ弓張提灯は、本町四丁が上紅で新町四丁が下紅と、区別がはっきりされています。幟や旗にも紅白の区分がありますが、紅は太陽を、白は月を現わすと聞きます。山笠の勢子、頭が主ですが、去年頭だった先輩が加勢人、おと年頭だった先輩が先加勢人、その前の年の頭だった先輩が万加勢人と呼ばれ、この子達が中心となって世話采配をします。これに従って町中の子供達が、二本の山笠にかかります。

黒田の陣太鼓をそのまま取り入れたと言われる山笠太鼓の音に奮い立ち、風に凍てつく町中を、元気に引き廻す勇ましい行事です。午後三時前後、御遷宮が行われます。山笠に鍛え上げられていた子供達が、寒風に頬を真っ赤にして元気溢れる顔を揃え、御神幸の御道具の幟や旗を持ち、長い列を作ります。頭は恵毘須神社の御紋入りの白の法被を着け、金御幣、獅子頭、五十鈴、弓矢、鉄砲等の御道具を持ち、行列の先導に当たります。加勢人の中の大きい子は、烏帽子に白丁姿となり、御輿をかつぎます。単調な笛と太鼓に合わせて

「泊れ 泊れ 旅の客
足も 手も つめたかろう セー
トンテントン（太鼓の音）」
「雪まるかし かんしょうぶ
足も 手も つめたかろう セー」
「豆腐 こんにゃく 山いも
生でくえば がじがじ
やいてくえば ほうやほやセー」

と、歌いながら町内を巡幸します。人びとは皆、門先に出て額づき拍手を打ち礼拝し、御神幸を御迎えし御見送りします。トンテントンと太鼓の音だけが、遠ざかりながら暫く残り、この日静かに暮れてゆきます。次の日、朝から二本の山笠のドンド、ドンドの太鼓の音と、ワッショワッショの掛け声が、町内中を駆け巡ります。やがて勢子達の大声が、かすれて嗄れて、夜が迫って来る頃に子供達の恵毘須祭りは終ります。

明治末期までの子供達は、恵毘須堂に籠り、

「西へ西へと指してゆく
西は最後の弥陀如来
エエなむあみだーあみだぶつ」
「姉さん上げなれ　後生になる
上げればお前の　先のため
エエなむあみだーあみだぶつ」

と、念仏を唱え、頭は袋をさげ、加勢人は鉦を叩き、あの村この村と修行し、お米上げましょ、木屋瀬恵毘須、私も上げましょ木屋瀬恵毘須と、吹雪の村で、時雨の村で、親しく迎えられていた。寒念仏という神仏混淆の名残りの寒行にも堪えていました。（次号へ続く）

本町　柴田由美子

【柴田豊廣遺稿集】より
小倉郷土会刊「記録第十八冊」への寄稿

企画展ご来場ありがとうございました

次回（第56回）は「木屋瀬の絵師 新谷鐵儁（仮）」

第55回企画展「みんなが持ってた、遊んでた ちょっとレトロなおもちゃ館」（平成26年7月19日(土)～9月28日(日)）は、昭和40年代のおもちゃを中心に、ちょっと懐かしいおもちゃや生活道具等を展示しました。期間中は夏休みということもあり、親子で楽しまれる姿が見られました。来館者1650名とたくさんの方にお越しいただきました。誠にありがとうございます。

次回、第56回企画展「木屋瀬の絵師　新谷鐵儁（仮）」は平成26年10月25日(土)から約1ヶ月開催予定です。昨年、末裔の方から寄贈していただいた貴重な掛け軸等を展示致しますので、ぜひ足をお運びください。

住民要望を受けた木屋瀬自治区会主催の第1回こやのせ楽遊祭町内選抜カラオケ大会を9月7日日曜日にこやのせ座で開催したところ、およそ200人の方々が来場されました。

当日の大会では、町内選抜者19人の熱唱、飛び入り参加者や井上審査委員長の歌唱、ビヴァーチェのキッズダンスや大正琴演奏が披露され、観客の皆様からの暖かい声援もあり、大いに盛り上がりました。

こうした中、町内選抜カラオケ大会では東中町の須藤玲子さんが情感のこもった歌声を披露して優勝しました。

こやのせ楽遊祭は2回、3回と開催する予定です、楽しみにしてください。

最後に、準備から運営に携わった町内会長を始めとするスタッフの皆さん及びバザーを実施してくれた木屋瀬宿記念館運営協議会の皆さんに感謝申し上げます、お疲れ様でした。

文化発信の寄せ太鼓。こやのせ座発、全国行き。ホームページ http://www.city.kitakyushu.lg.jp/shisetsu/menu06_0005.html

木屋瀬宿の川艜文書
②遠賀川の川艜と船頭

木屋瀬みちの郷土史料保存会　松尾　良美

「鞍手郡木屋瀬村川艜船頭共仕上ル記請文之事」なる文書は、十一箇条にわたって書き綴ってあるが、箇条書きの内容の概要を項目毎に挙げたい。(一)船の破損や御米濡腐れ（船の修理や濡腐れ米の取替）(二)積荷の不法な転売行為　(三)船作事（造船や修理）(四)積荷米俵の霧雨による濡防止（茅や菅で編んだ覆いの苫（屋根）を掛ける　(五)半米の所持（欠米は残らず処理する）(六)上乗百姓の不法行為（輸送で乗船した百姓の違反の行い）(七)博打や諸勝負事（船上での賭け事）(八)流船の措置（洪水等の際に何方より流船を繋留する）(九)御年貢米の清米選択（上納の年貢米選びや米俵拵えも丁寧に）(十)欠米（年貢米輸送の折に生じる目減りを補う為の予備の米）(十一)上乗百姓（年貢米輸送・積下しの際に必ず船一艘に付百姓一人乗り込む）以上が川艜船頭達が年貢米を始めとする米を川艜で輸送する場合の仕法（方法）や心得の請書（依頼や命令に対して承諾書）である。

史料館に展示してある筑前木屋瀬飴屋組合の「商売神文之事」には、起請文の形式に従って各自が守るべき箇条書きの文言の後に「右神文之ケ條堅ク相守可申候、自然相背候者於有之ハ連中方飴商売差止メ可申候、其節余人之扱ひ決而相用不申候事仍而神文如件。」の誓い字句と年月日並びに氏名と押印がなされている。川艜船頭共の起請文では、右記の神文と年月日が欠除していることは、幕末か明治初年代のものだと全文の内容から推測できるし、現存しているこの起請文は三ヶ所に修正された箇所があるので、完成された正文ではなく下書用の案文であったので、神文や年月日が書かれていなかっただろうと思う次第である。

年貢米を積み込む船着場を本場とか米場と云って、遠賀川流域では木屋瀬場・植木場・直方場・芦屋場の各地域毎に船着場があった。木屋瀬の米場は、現在の長崎街道木屋瀬宿記念館裏の堤防下の川岸から、川中に向って十数メートル程に、石を積み重ねてた構築された突堤のように、川艜が横付に繋留ができる船着場であった。

私共の少年時代の昭和十年代は、この場所を「鎮所」と呼んでいた。川中に長く突き出て鎮所と呼んだ突堤状の構築物は、水の流れを止めたり、水深が維持されていた。水深が背丈より深い場所なので、泳ぎに自信がない者はこの鎮所では泳がなかった。

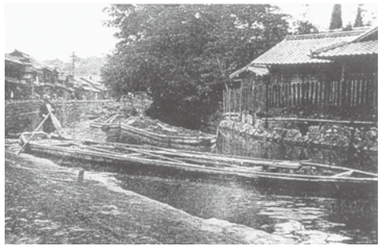
郷土史家故能美安男氏が昭和四十八年の八幡郷土史会創刊号「郷土八幡」に、この川艜船頭共起請文に関して記述された内容を紹介していきたい。

遠賀川乃至江川を利用して居た川艜は、天保八年（百八十九年前）には、嘉麻、穂波両郡に百九十艘、遠賀・鞍手両郡に二百二十四艘であった。その内木屋瀬場としては、本場二十四艘・上荷場二艘・石炭場四艘・御救方場二艘で合計三十二艘が挙げられている。約三十年後の慶応三年には遠賀・鞍手両郡の川艜は増加して、二百六十五艘になっているが、これ等の川艜は米穀を運送して居る期間は僅の季節であった。諸荷物積出も幕末時には殊の外減少していた為、もっぱら御仕組焚石（藩直営販売の石炭）の積出運送を渡世（生業）としていた。

木屋瀬場の川艜は木屋瀬周辺の米穀積出のみならず、中泉辺の米穀も積出をしている。

木屋瀬にて年貢米や米囲（飢饉に備えて村々の郷蔵に貯えた米穀）が取立てられたのは、感田・木屋瀬・頓野・上頓野・金剛・上境・野面・中泉・永満寺・南良津・勝野・新多・新山崎・畑・下境・笹田・赤池・御徳・山部・直方・知古の各村々であるので、木屋瀬の米場の二十四艘の川艜は、右記の村々の年貢米を運送したのであろうと能美氏が記述されている。

以上の如く幕末時から明治年代にかけて、遠賀・鞍手両郡の二百六十艘に及ぶ川艜が、帆を揚げ、長い棹や櫓を操作して緩やかな遠賀川を往来する川艜の姿は、正に壮観であっただろう。また、船頭衆は度胸と男気を張ったものである。「御機嫌よう!!」のNHKの朝ドラマ「花子とアン」に登場する葉山蓮子のモデルと稱された、柳原白蓮に絶縁状を突き付けられた「筑豊の炭鉱王」と言われた伊藤伝右衛門翁も、若き頃は遠賀川で川艜を漕いだ船頭衆の一人であったという。



唐戸付近を下る川艜（大正期）

今年で9回目！夏の恒例イベント

こやのせ座納涼落語会

毎年恒例となりました「こやのせ座　納涼落語会」も今年で9回目を迎えることとなりました。当日は暑さ厳しい中にも拘わらず、130名とたくさんの方にお越しいただき大変な賑わいとなりました。

今回の出演者は、於家馬亜（おやまあ、佐藤弘毅氏）、好色亭勘六（こうしょくていかんろく、浦田一幸氏）、粗忽家鉄平（そこつやてっぺい、新森修二氏）、好色亭慶御（こうしょくていけいおん、松中保明氏）、粗忽家無笑（そこつやぶしょう、神代明氏）の芸達者な5名が、暑さを笑いで吹き飛ばしてくれました。

お越しいただいた皆様、出演者の方々本当にありがとうございました。

（おわび）平成26年8月9日に予定しておりました、こやのせたなばたまつりは台風接近のため中止とさせていただきました。楽しみにして頂いていた方々、また当日お越し下さった方々、大変申し訳ありませんでした。また次の機会にぜひお越し下さい。

古来からの伝統行事

庚申祭

去る九月一日月曜日、午後七時より平成二十六年度庚申祭が執り行われました。

午後よりの雨模様、関係者一同空を仰ぎ気をもみましたが、夕方にはすっかり雨も上がり神事の準備等順調に進み、無事お宮様やお詣りの方々をお迎え出来ました。

午後六時五十分宮司末松様の御神笛の音が厳かに庚申祭のはじまりを告げ、定刻の七時より神事が開催されました。

宮司末松様の祝詞の後、各代表者に依る玉串奉献が行われ、厳粛の内進行され過刻七時三十分に滞りなく終了の運びとなりました。

その後宮司末松様より暫し、当木屋瀬地区に於いて四百有余年太古の古より続く伝統ある庚申祭に纏る昔からの逸話などユニークな笑いも混え、ご講話いただき参拝者一同歴史絵巻を胸に直会に入りました。

須賀神社責任役員梅本静一様のご挨拶をいただき、流れに依って一番手・二番手・三番手が入り散会となりました。地域の同級生あり、先拝あり・後拝ありの中昔話しに花が咲き、出席者皆散会し難くこのまま時が止まればと思ったにちがいありません。大変和やかの内、散会となりました。

皆様のお陰をもちまして、由緒ある木屋瀬の行事のひとつ庚申祭を無事に行う事が出来ました事、参拝者の方々並びに関係者の皆様に御礼申し上げます。

今後共、この行事が十年・二十年と末永く続きます事をお祈り申し上げます。

平成二十六年度当番町　下町町内会長　野口　晋

シリーズ

筑前木屋瀬宿 神仏めぐり
第三十二回 須賀神社
～末松宮司を訪ねて～（その一）

近年日本列島の気象は異常なようです。夏に雹が降ったり、天の一角に穴が開いたような猛烈な雨が各地で降ったり、雷が落ちたり、土砂崩れ等、日本全土に甚大な被害が多発しています。四季が分かりにくくなってきたような感じがします。

この自然の猛威に、現代の科学では、何らなすすべの無いのが現状です。古代から日本人は、自然現象は神の差配であると信じ、神の怒りに触れぬよう自然を大事にし、お祭りをして神に安全を祈願してきました。

さて、木屋瀬地区は、近年大きな自然災害もなく無事に過ごすことが出来幸いです。九月始めに、木屋瀬地域の産土神（土地の守り神）の須賀神社の社務所に末松宮司を訪ねお尋ねしました。

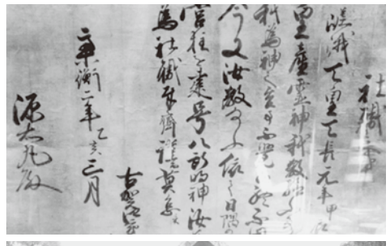
須賀神社は、四神の神様をお祭りしてあります。

1　素戔嗚命（すさのをのみこと）
「疫病退散　災害防止の神」
2　奇稲田媛命（くしなだひめのみこと）
「五穀豊穣　商売繁盛の神」
3　大己貴神（おおなむちのかみ）
「縁結び　家内和合の神」
4　軻遇突智神（かぐつちのかみ）
「火の神　火災予防の神」

須賀神社第51代
末松公博宮司

軻遇突智神は、木屋瀬で頻繁に火災がおこるので、明治15年に勧請し合祀されました。

末松家は大変古い歴史を持つ家柄で、現在の末松公博宮司は、51代目でお父さんの末松公稔様からを引き継がれています。その51代に亘る系図も見せて頂きました。又、嵯峨天皇の時代に、この地方を治めていた、古賀郷督よりの、「社職の事」（司令書）も残されていました。社職の事とは、宮司への任命書で「怠りなく勤めよ」と書かれています。宛名が源太丸となっていましたが、この方が末松家の先祖の方です。大変古い歴史を代々引き継がれてきていることに感動して、「社職の事」を拝見しました。



源太丸殿への社職の事（上）と須賀神社神殿（下）

末松宮司は、昭和四十五年から禰宜（ねぎ）として、現在の須賀神社の社務所に住まわれ、昭和五十五年に宮司に就任されました。現在木屋瀬の須賀神社の他に、興玉神社（猿田彦神）、扇天満宮、野面の八所神社、笹田の舞岳神社、金剛の前岳神社、田の口の本宮神社の宮司もなされています。宮司は、昭和八年生まれで、今年で八十一才を迎えられていますが、毎朝、神殿で太鼓を叩き「日朝拝」をなさり、毎月1日には、十数名の氏子と共に「月次祭」を行い、地域の安全と氏子の幸せを神に祈っておられます。この月次祭はどなたでも参列できます。

又、境内には、本殿の神様とは別に、摂社の神様が祭られています。

恵比寿神社（商売繁盛）　厳島神社（水の神　海上の安全）
工（たくみ）神社（物創りの神）稲荷神社（五穀豊穣　商売繁盛）で、それぞれ、神徳が違います。

平安時代の歌人の、西行は、伊勢神宮で「何事のおはしますともしらねども かたじけなさに涙ながるる」と詠んでいます。この須賀神社境内も、神が降臨される神域で神の気配が感じられるような気がします。

稲の香や産土神社朝太鼓
南風（なんぷう）や昔宿場の火事籠り

（本町　野口靖彦）